

野宮の、みやは小倉山をぐらやまの巽なる藪の中にあり、悠紀主基ゆきすきの両宮ありて、神明を祭る。黒木くろぎの鳥居とりぬこ小芝墻しばがきはいにしへの遺風なり。
伊勢太神宮いせだいじんぐうへ齋宮いしんわうに立せ給ふ内親王、此所に三とせばかり住給ひて穢潔し給ふ。齋宮のはじめは垂仁天皇すみにんてんわうの御宇皇女ぎようくわうによ
倭姫命やまとひめのみことなり。「野の宮の別れとは、例によつて九月上旬吉日を卜定して、伊勢太神宮いせだいじんぐうへ向ひ給ふとなり、後鳥羽院ごとばのあんの御宇に此事絶ぬ」

の、宮に齋宮さいくうの庚申し侍りけるに、松風入二夜琴一といふ題をよみける

拾遺 琴の音に岑の松風かよふらしいづれのをよりしらべ初けん 齋宮女御

同 松風の音に乱る、琴のねをひけば子日の心ちこそすれ 同

雪のあした野の宮みやにて

続古 柚さす柴のかきほのかずくに猶かけそふる雪の白ゆふ 入道前太政大臣

野宮より出給ふとて

玉葉 すゞか河八十瀬やそせの波は分もせで渡らぬ袖のぬる、頃かな 契子内親王